

【25】他山文鈔

刊1冊

製本発売人 東京府平民 吉川半七

東京々橋区南伝馬町
一丁目十二番地

〔書名よみ〕たざんぶんしょう 〔著編者〕工藤主善

〔写刊年次〕明治一七年（一八八四）

〔所蔵者整理書名〕他山文鈔

〔外題〕題箋欠

〔内題〕他山文鈔

〔その他題〕版心 他山文鈔

〔残欠状況〕完本 〔保存状況〕やや不良（角裂に破れあり。） 〔装

訂〕袋綴・四つ目 〔紙数〕三三二丁 〔本文用字〕漢字 〔二面行数〕

一〇行 〔界線〕アリ 〔表紙〕紺色・無地 〔法量〕縦二三・八糪
×横一四・〇糪 〔料紙〕楮紙 〔書入〕ナシ 〔蔵書印〕「海浦」
(朱印) 〔備考〕ナン

〔奥付〕明治十七年六月一日出版御届

同 年七月 出版

著者 青森県士族 工藤主善

青森県中津軽郡弘前

鷹匠町六十八番地

外崎覚 「外崎」(朱印)

東京牛込区若宮町

三十七番地寄留

出版人 青森県士族 小笠原精一

青森県中津軽郡弘前

北瓦町廿番地

〔解題〕

工藤主善（以下他山。これは号で本名は主膳だが、外崎覚はすべて主善と書いている。）は文政元年（一八一八）に弘前に生まれ、明治二二年（一八八九）に七二歳で没した。弘前藩士古川儒伯を父として生まれ、三六歳の時に独立し、工藤姓を名乗った。『津軽藩史』をまとめた郷土史家として知られるが、他にも津軽藩の藩校・稽古館で教鞭を取つたり、私塾・思斎堂（別称古川塾）、それを発展的に再編した向陽塾を開いたり、六〇歳の時には東奥義塾に招かれ、教授として一〇年間在職するなど、生涯を通じて津軽地方の教育振興に貢献した人物でもある。『津軽藩史』と本書の他に著作として、『津軽藩職制』、『津軽藩官制』、『津軽藩禄制』、『津軽藩租税則』、『津軽藩学制』、『津軽藩儒臣略伝』、『靈墓碑史』、『他山詩文集』がある。

『他山文鈔』は他山の二男であり、本人も父と同様史家として知られる外崎覚によつて編まれた、他山の手による漢文を抄録した著作である。書を読むことの意義を説くものや、酒と茶のいすれが優れているかといった論考、他人の著作に寄せた序文、弘前城の碑文など、様々なか

イの文が収められている。

覚は父が詩文をいかに重んじていたかについて、「文を作る必ず之を道義に原け短篇片章亦世教を裨益するを以て念となす恒曰く文は道を載する所以なり豈に尋常芸科と見做すへんやと詩は務めて実際を叙し浮華を事とせず最も平生愛する所のものは宋陸放翁の詩なり」と伝えている（「旧津軽藩稽古館学士他山工藤主善先生伝」）。

本書は他山自身によるものというよりも、息子の外崎覺の尽力により成立したと見た方がより適切である。見返しにある「中洲三島毅先生評点」という言葉の通り、本書には文章ごとに中洲による評言が見られるが、中洲は外崎が二五歳の明治一六年（一八八三）に東京に上がった際、主教を受けた人物である。また、「他山文稿敘」は版心に「宮内文学川田君序」とある通り、甕江川田剛によつて記されているが、彼も覚の東京での師に当たる。本書の刊行は覚の上京から一年後にあたり、覚が精力的に父の事績を形にして残そうと図つたことが窺える。

そのことは、中洲三島毅が記した「後記」にも見ることができる。

川田甕江門人外崎覺将刻其父他山翁文稿、携來嘱評、且出示甕江介書、其書曰、近日文章流行、四方乞評、如此者定多、余深恐煩子、然翁學問文章、為奥羽地方巨擘、且覺懇請不已、子其勉評之余忽忙、突如甕江所察然懇々之言亦不可空、乃偷閒披閱之、有学植、有文藻、又実如甕江所称、感服之余、每篇加評、付覺、然忙中卒讀、誤見定多、請恕、

なお、外崎覺は海浦義觀の学友であり、その関わりから義觀の『陸奥津軽深浦沿革誌』には序文を寄せている。同書にはまた、陸堀南の序文もある。そこには「海浦義觀は深浦の旧家なり。其弟篤彌は予と交る」と旧し。今現に朝鮮京城に在り。頃者義觀其著す所の深浦沿革誌を寄せて。予の一読を促す」と、寄稿の経緯を述べている。堀南は思斎堂に学んだ、いわば他山の教え子でもある。海浦家人びとの事績を通して、

〔参考〕

明治初期における津軽の知識人たちの密な繋がりが窺える。

・外崎覺「旧津軽藩稽古館学士他山工藤主善先生伝」（『日本大家論集』第四卷第一〇号、一八九二年一〇月）

・海浦義觀『陸奥津軽深浦沿革誌』（深浦保勝会、一八九八年一二月）

・鈴木清造「工藤他山伝」（『東奥文化』第四三号、一九七一年八月）

・川村欽吾「明治の津軽びと3 外崎覺（1）」（『月刊れぢおん青森』第五〇号、一九八三年一月）

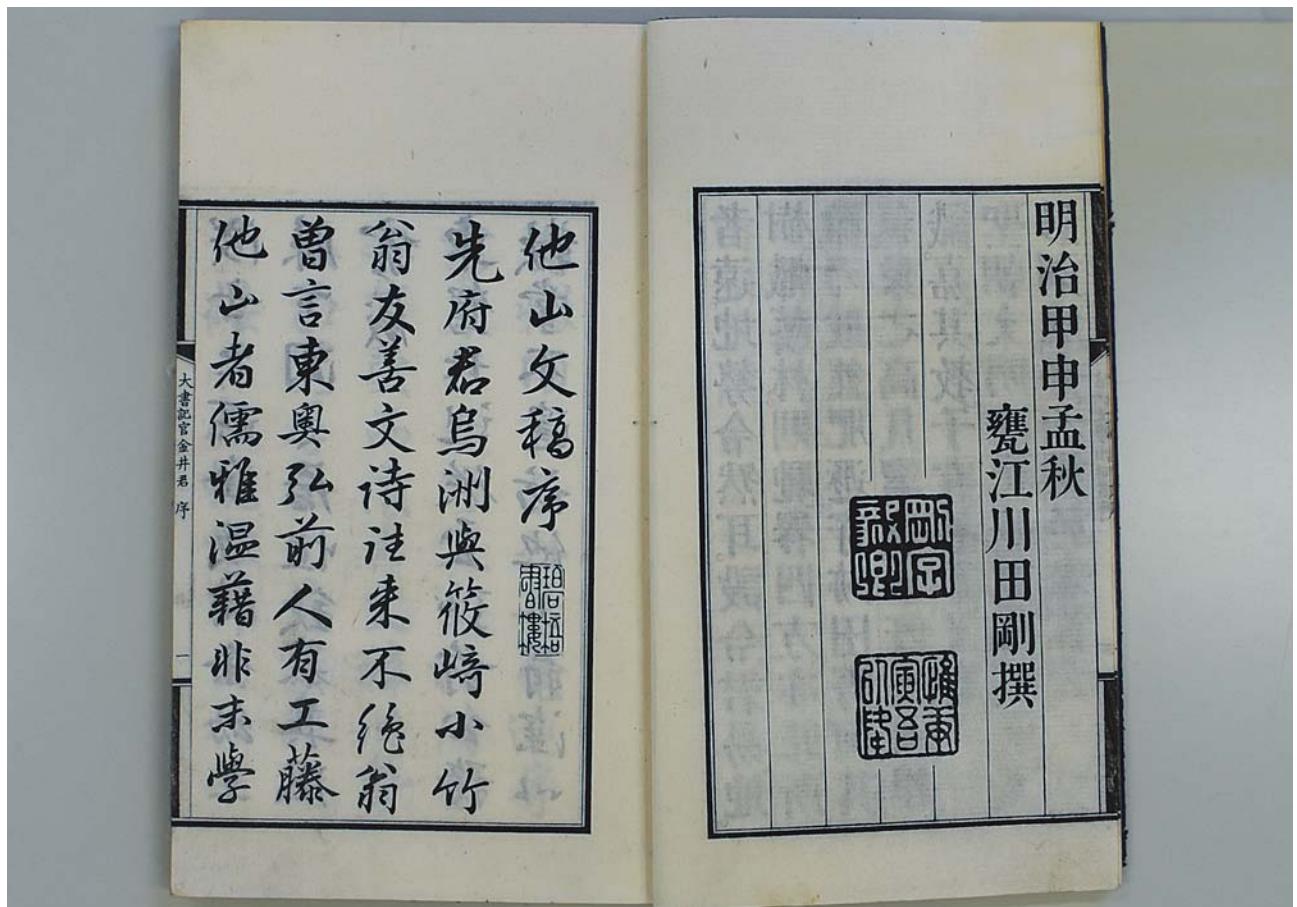
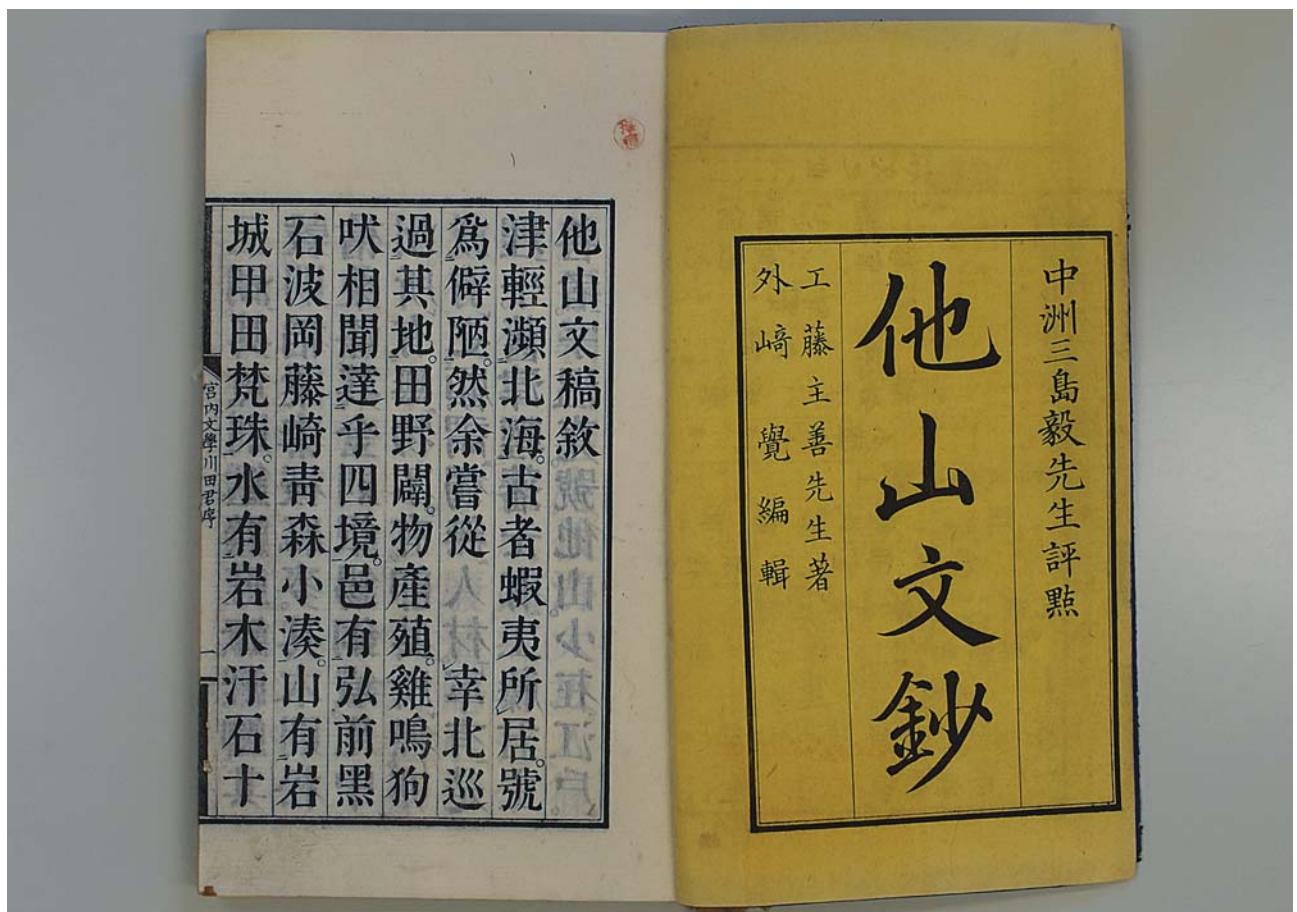
・川村欽吾「明治の津軽びと3 外崎覺（2）」（『月刊れぢおん青森』第五一号、一九八三年二月）

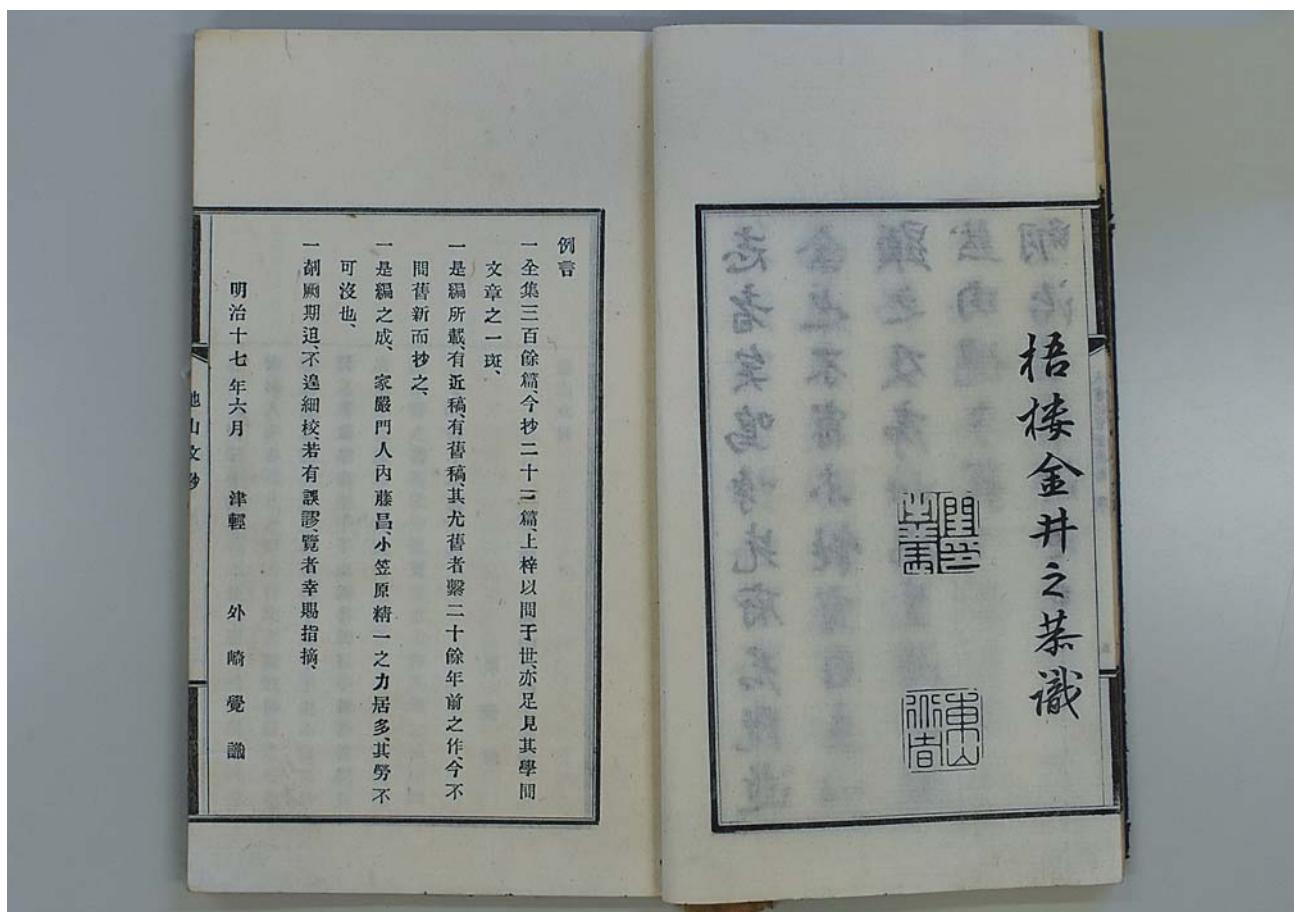
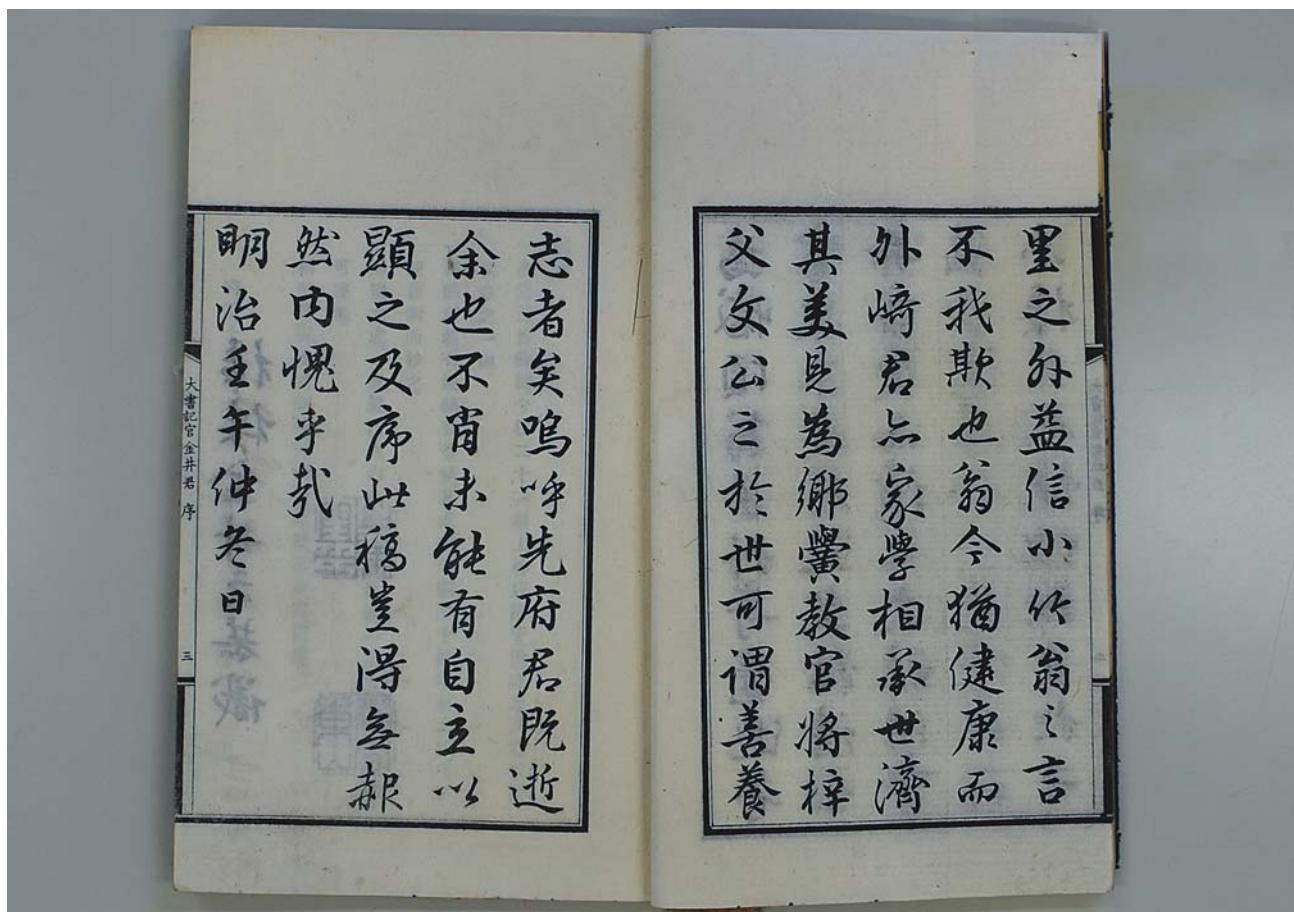
・荒井清明『続々弘前今昔』（北方新社、一九八九年七月）

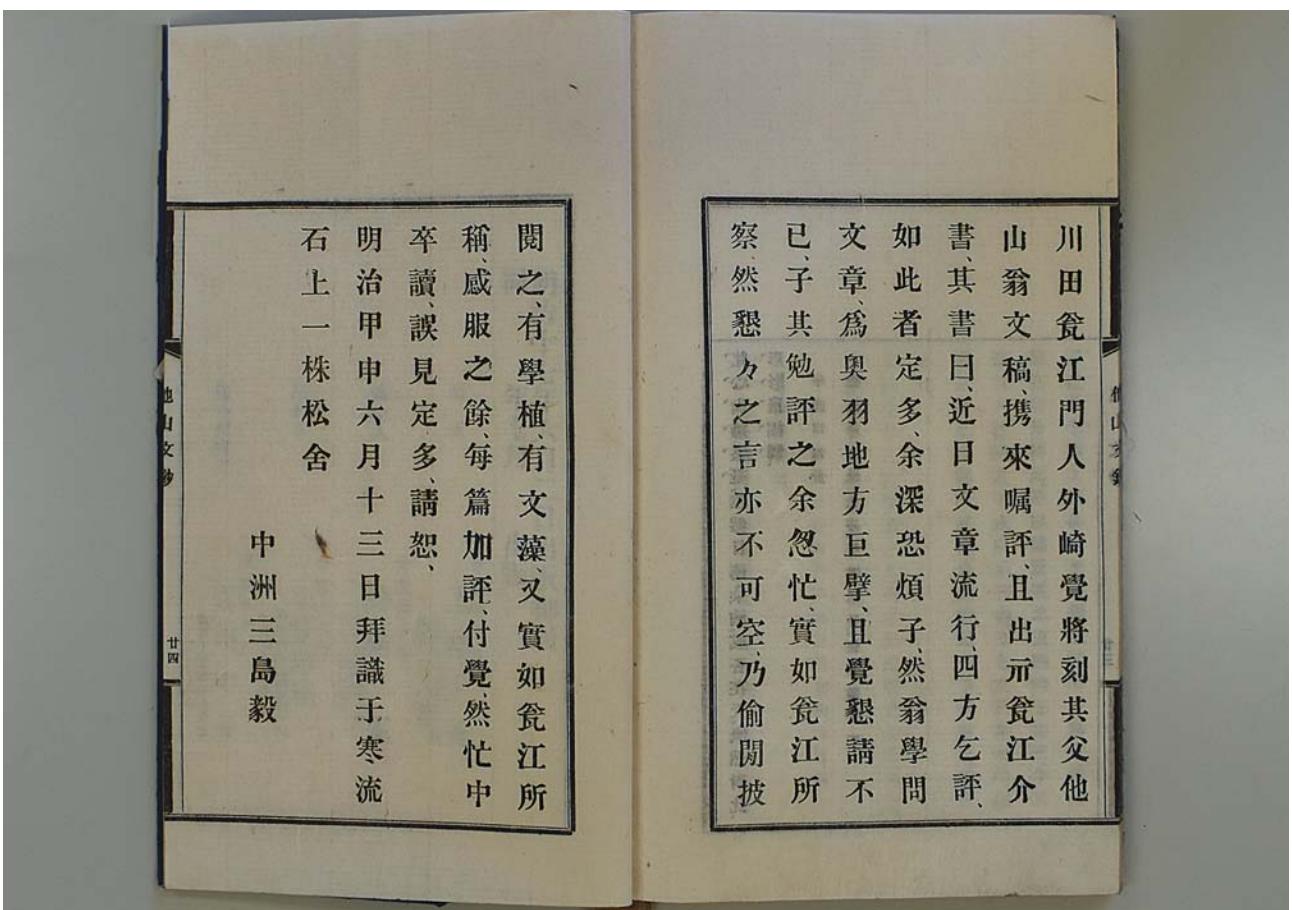
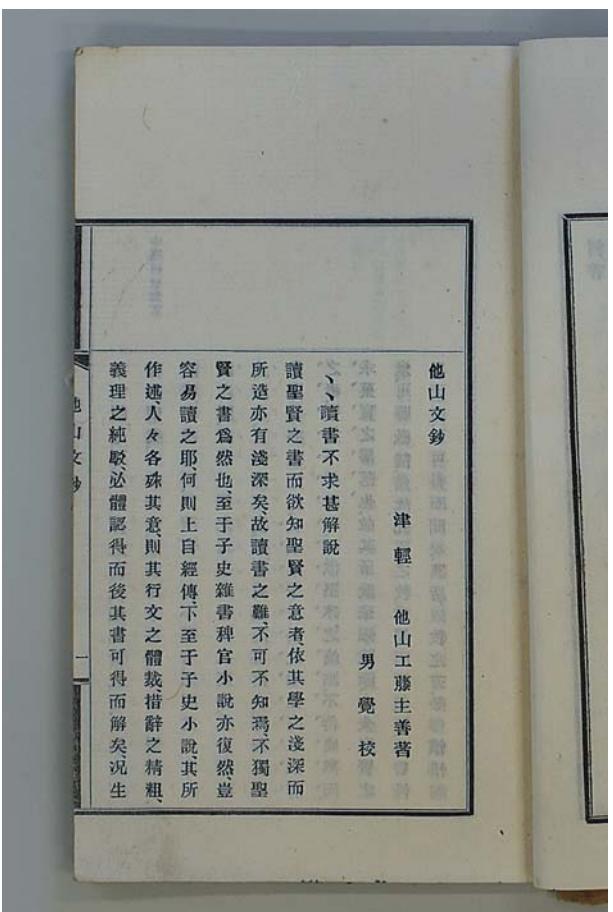
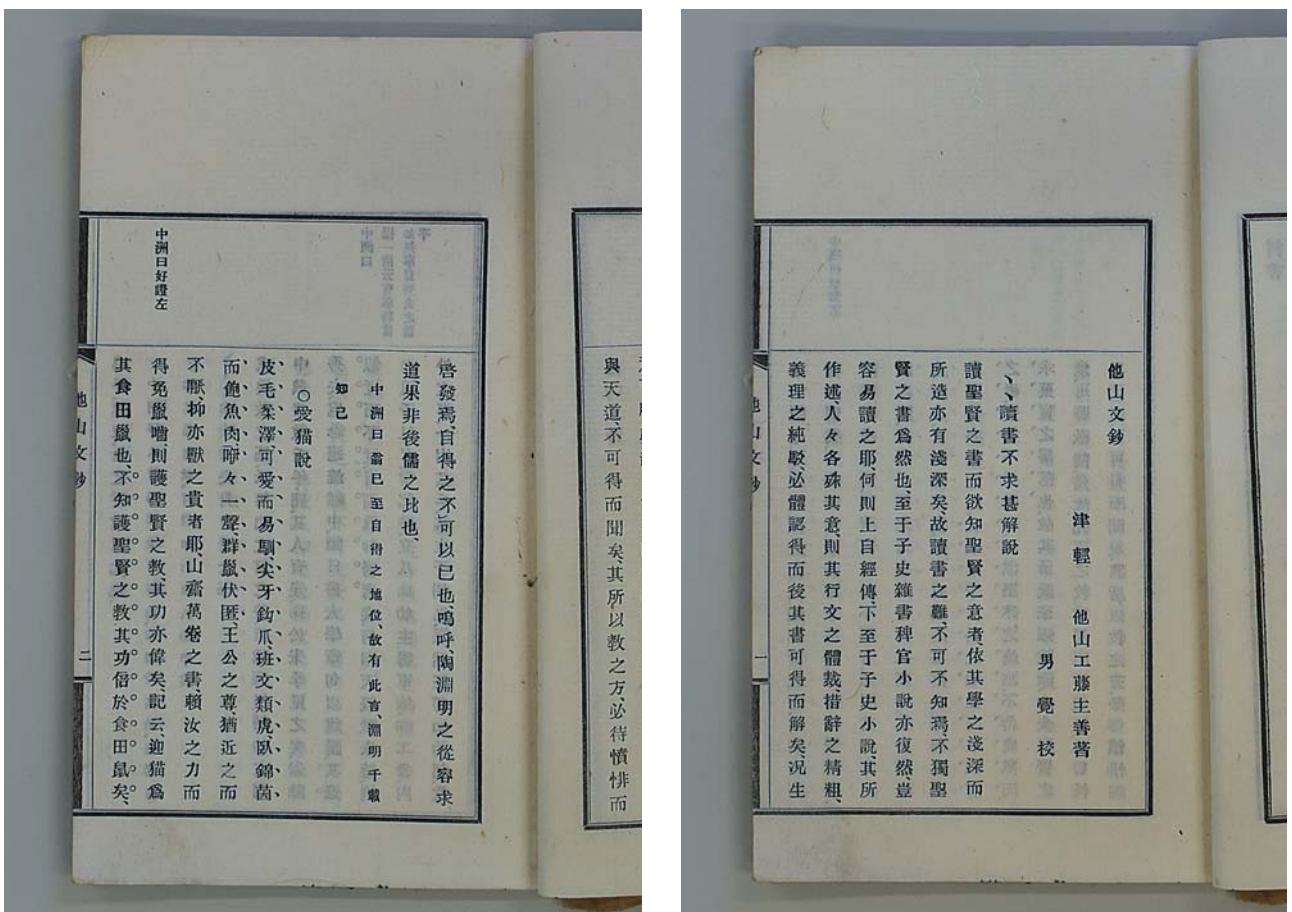
・海浦由羽子『驗乘末資海浦義觀』（深浦町教育委員会、二〇〇三年三月）

（尾崎 名津子）









川田翁江門人外崎覺將刻其父他山翁文稿携來嘱評且出示翁江介書其書曰近日文章流行四方乞評如此者定多余深恐煩子然翁學問文章爲與羽地方巨擘且覺懇請不已子其勉評之余忽忙實如翁江所察然懇乞之言亦不可空乃偷閒披

閱之有學植有文藻又實如翁江所稱感服之餘每篇加評付覺然忙中卒讀誤見定多請恕

明治甲申六月十三日拜識于寒流石上一株松舍

中洲三島毅

啓發焉自得之不可以已也嗚呼闊淵明之從容求道果非後儒之比也
中洲曰翁已至自得之地故有此言、闊明千載
如己
○愛貓說
中洲曰好護左
也山文抄

皮毛柔澤可愛而易馴尖牙鈎爪斑文類虎臥錦茵而飽魚肉醉々一聲群鼠伏匿王公之尊猶近之而不厭抑亦獸之貴者耶山齋萬卷之書賴汝之力而得免蟲噏則護聖賢之教其功亦偉矣記云迎貓爲其食田鼠也不知護聖賢之教其功倍於食田鼠矣